

カルナップは還元主義か

高橋 和孝 (Kazutaka Takahashi)

北海道大学大学院理学院

クワインの決定不全性テーゼは、「有意味な言明はすべて直接経験的に検証可能な言明へ論理的に還元できる」とする論理実証主義的な還元主義に対する決定的な批判として知られている。それは素朴な進歩主義的科学観を否定し、より相対主義的な新科学哲学の到来を準備するものであった。

ホーリズムとして知られるこうしたクワインの思想は、「分析的／総合的」というカント以来の伝統的二分法をめぐる、カルナップとの論争（カルナップ＝クワイン論争）を通じてその多くが形成された。クワインの決定不全性テーゼが、とりわけカルナップ哲学に対する決定的な打撃を与えるものとして認識された背景には、こうした事情が少なからず影響しているものと考えられる。

このような中で、80年代以降活況を帯びた、フリードマンやクリースなどによる歴史的研究は、カルナップ哲学の再検討の可能性を切り開いたものとして知られる。とりわけ、クリースによる、カルナップとクワインの書簡でのやり取りを集めた編著は、彼らの論争を綿密に追跡することを可能にするたいへん貴重な資料である。本発表ではまず、こうした最近の研究成果を踏まえ、カルナップの著作を検討することを通じて、クワインが展開する還元主義批判は、カルナップに対する批判として適切なものではないことを示したい。すなわち、決定不全性テーゼについてはカルナップも同意するところであったことを明らかにする。

しかし、カルナップが決定不全性テーゼを受け入れていたという事実は、ひとつの困難を引き起こすのである。それは、カルナップ哲学の核心ともいえる「形而上学（外部の問い）と経験科学（内部の問い）の峻別」と決定不全性テーゼとは両立しないのではないかという問題である。フックウェイは、こうした一見すると両立しないようにみえるふたつの立場を同時に保持するカルナップの態度を「謎」としている。

以上のことから、本発表では、カルナップが決定不全性テーゼに同意していたことを手短かに確認しつつ、そこから生じる「謎」の解明を試みることにしたい。そこでカルナップの還元主義の適切な解釈が提示される。クワインが批判した意味での還元主義は当てはまらないとしても、カルナップ哲学はやはり一種の還元主義として理解されるのである。